

富山県上市町

# 弓庄城跡

緊急発掘調査概要



1981年3月

上市町教育委員会

## 目 次

## 例 言

例 言	
I 遺跡の環境	1
1. 遺跡と周辺	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
2. 弓庄城について	2
3. 『弓之庄古城之図』について	2
第2図 弓之庄古城之図	3
II 調査の概要	4
1. 調査の経緯	4
2. 第1期調査	4
第3図 区割図	5
第4図 1～3区	6
第5図 1～3区・遺物実測図	7
第6図 4区	8
第7図 5区	9
第8図 6区	10
第9図 6～8区	11
3. 第2期調査	12
第10図 第2期調査	12
a. 遺構	13
第11図 井戸	13
第12図 溝	14
第13図 第2期調査発掘区及び SD02・遺物実測図	15
b. 遺物	17
第14図 第2期調査・遺物	17
第15図 第2期調査・遺物	18
III まとめ	19
第16図 第2期調査・遺物	19
引用・参考文献	20
第17図 弓庄城周辺の字名図	21
付図 弓庄城・遺構実測図	

1. 本書は、団体宮ほ場整備事業（緑沢南部地区）に伴う。富山県中新川郡上市町弓庄城跡の発掘調査概要である。また、調査は、昭和55年10月14日から11月14日の第1期調査と、昭和55年12月4日から12月26日の第2期調査に渡った。
2. 調査は、国庫および県費補助金の交付を受けて、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受け上市町教育委員会が実施した。
3. 調査事務局は、上市町教育委員会におき、社会教育課長井戸川邦男・同上事広島大志が調査事務を担当した。また、調査期間中、文化庁記念物課・富山県埋蔵文化財センターの指導を得た。
4. 調査参加者は、次のとおりである。  
富山県埋蔵文化財センター酒井重洋・神保孝造（以上調査担当者）橋本正春・奥村吉信・岸本雅敏・宮田進一・久々忠義（以上調査員）有馬明吉・山村邦郎・阿部浩一（以上調査補助員）三鍋弘悦・平川喜一・平川正雄・本松義雄・岡崎守賢・林盛弘・榎島三郎・町田喜久雄・富川清隆・堀井節子・種田瑛子・種田ハナエ・種田富喜子・種田富美子・古本裕子・町田フミ・山崎敦子・伊東君子・伊東三重・薄田ヤイ・山崎エミ子・高橋照子・岡崎つぎ・小川ミヨ・中田静子・三鍋愛子・青木花枝・林陽子・内田ワジエ・松藤タキ・松藤初枝・本松操・松原ミツエ・野中文子（以上参加者）
5. 本書に掲載した遺構実測図は、酒井・神保・奥村・橋本・岸本・宮田・久々・高慶孝・有馬が作成した。写真撮影は、遺構を酒井・神保・橋本が行ない、遺物の写真撮影は、狩野睦・橋本正春が行なった。また、遺物の整理・実測図の作成・トレース等は、酒井・神保・奥村・高慶・有馬が分担した。
6. 本書の編集・執筆は、所員の助言・協力を得て、酒井・神保・奥村・橋本・高慶が分担して行ない各々の責は、本文に記した。また、資料整理・執筆にあたっては、高岡徹氏の助言を受けた。

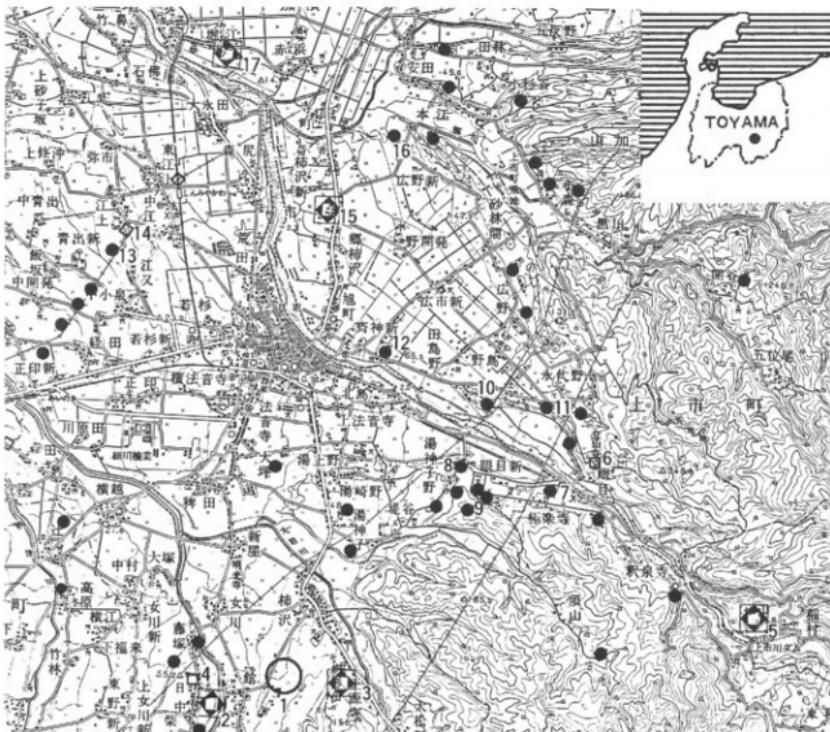
# I 遺跡の環境

## 1. 遺跡と周辺

弓庄城跡は、富山県中新川郡上市町館地内に所在する。町の西南部を流れる白岩川と、その支流の大岩川に挟まれた樹形山のふもと。標高50m前後の丘陵上に位置する本遺跡は、正平年間（南北朝期）の頃よりこの地を支配した土肥氏の居城があったとされている。現在この一帯は、一部をのぞきほとんど水田として使用されており、明治・大正時代のは場整備で、地割などの旧状はとどめているが、堀跡の水田は多少の高低差を見せており。また本丸跡と伝えられる水田からは上市町が一望できる。

城跡の周囲には、白岩川を挟んで弓庄城と相対する日中砦跡、弓庄城跡の東側樹形山の郷田砦跡、樹形山のさらに東側城ヶ平山の山上にある若荷谷山城がある。日中砦跡は、佐々成政が弓庄城を攻めた時の拠点であったといわれている。また、若荷谷山城は、弓庄城の奥城だったとも伝えられている。この他に、上市川東岸にそって、土肥氏の本城とされた堀江城をはじめとして郷柿沢館跡、上流に、稻村山城跡など、城跡が散在しており、土肥氏の勢力の大きさをうかがい知ることができる。

(高座)



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000) 1. 弓庄城跡 2. 日中砦跡 3. 郷田砦跡 4. 日置神社 5. 稲村城跡 6. 立山寺 7. 極楽寺跡 8. 丸山A遺跡 9. 眼目新丸山B遺跡 10. 野島遺跡 11. 永代遺跡 12. 齊神新古墳群 13. 江上A遺跡 14. 江上B遺跡 15. 郷柿沢館跡 16. 本江・広野新遺跡 17. 堀江城跡

## 2. 弓庄城について

土肥氏は、相模国土肥郷（伊豆河原町付近）を本領とした土肥次郎実平を祖にするとされている〔米沢 1975・石原 1956〕。この土肥氏の越中入<sup>和田</sup>は、明らかでないが、実平から五代目にあたる実綱が堀江莊に入部した時期（1350年ごろ）と考えられている。この堀江莊は、もともと祇園社領であったが、同莊でしだいに在地領主化する土肥氏に乗つ取られたようである。堀江城は、城主土肥中務入道心覚の名が『井上文書』（1352年）にみられ、すでに築城し、同莊内にも軍陣を設けたようである。このように在地化するなかで、堀江城を本城とし、稻村山城・千石山城・郷柿沢館・弓庄城・茗ヶ谷山城などの城館を構え、領主化を行なっていった。

弓庄城は、実綱の四代後の土肥政道が城主となり、政忠・正良（正繁）の三代の居城となった。このことは、土肥氏の勢力拡大にともない弓庄城を築城し、本拠地を移したとも思われる。16世紀入ると土肥美作守入道が井見莊の代官となったあと、しばしば土肥氏の名が文書に表われる（土肥氏は、数代にわたって美作守を名のったようだ）。16世紀中ごろからは、土肥美作守政繁が弓庄城に居城し、「天正の初め美作守の代に至るまで新川郡は大半これを領し、土肥氏五代丹庄城に據る」『三州志』のように、土肥氏がその支配を新川郡の大半におよばず戦国領主の地位を築き上げていたと思われる。堀江城は、天正の初め上杉謙信に攻められ落城している。こののちは、弓庄城が、土肥氏の本城となったようだ。また、このころ弓庄城は、ほぼ古岡に残る城構えであったと推測できる。

このころ越中で大勢をしめる上杉勢に属し、その地位も安定したと思われたが天正六年上杉謙信の死後、上杉勢の援助を受けられず、越中に進行する佐々成政・柴田勝家ら織田軍に従うこととなつた。しかし、天正十年織田信長が本能寺に討たれ、再び上杉側に寝返った。このため、成政は土肥攻撃を制圧するため、天正十年八月六日（1582年）に、弓庄城を攻撃したが土肥氏の堅固な防備のため落城できず退去した。この時、成政に人質に出されていた政繁の二男平助は縛りにされた。成政は、翌年四月に再び弓庄城を攻撃した。その際の城攻めのため森（日中荘・郷田荘など）を築いたと伝える。一方、土肥氏は籠城し、防備したが、越中の上杉軍の拠点魚津城が落ち、上杉景勝からの支援も受けられず孤立した。政繁は、同年8月成政と和談し、城を明け渡し越後にのがれた。その後、土肥氏は、上杉軍とともに越中へ兵を送ったが、領地の奪回はかなわず、越後に在住したと伝えられる。

## 3. 「弓之庄古城之図」について

弓庄城の城構は、『土肥家記』（金沢市立図書館蔵）にみられる「弓之庄古城之図」に詳しい。

城は、本城（本丸）に二重の堀を廻らし、郭を北へ向って連なる連郭式と思われる。本城は、「二十五間」（45m）で、南側は、掛橋によって結ばれる二つの郭（二の丸・三の丸）へと続く。また、北側は、「土ハシ」・「掛ハシ」により結ばれる郭があり、本城とともに土塁が設けられており、城の中権部分と思われる。

本城付近の堀は、東側の山裾の谷より水を引き入れたと思われ、「此川少キ谷の末用水川ナリ」と記載され、東側の堀は「竜ヶ池」と記入されている。本城の北側外郭部は、堀切により区画された郭が東西に二つづつ、三連並ぶ。また、この段丘は、「本城より北へしだいに低くなつてゆく」とも書かれている。

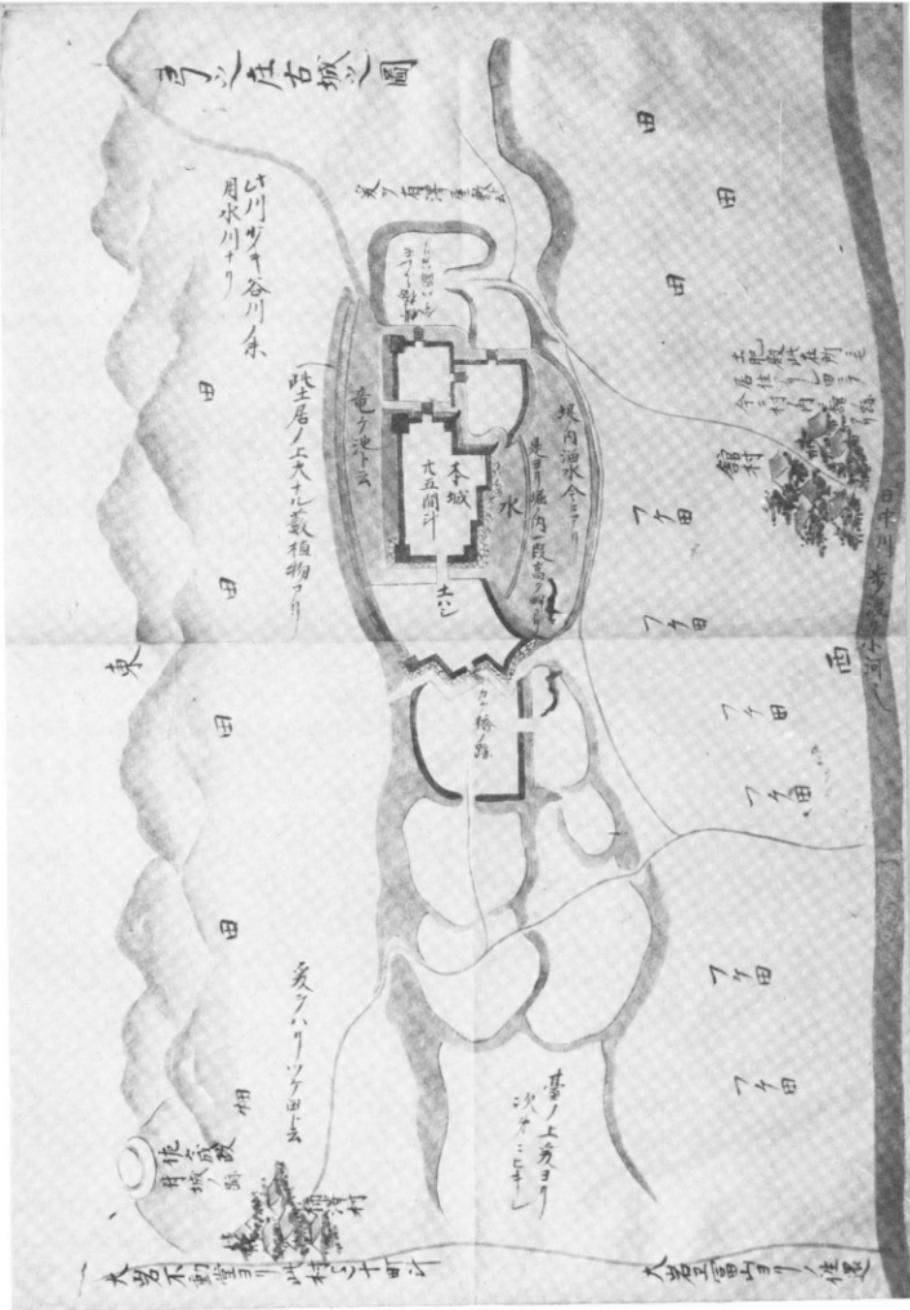
弓庄城のまわりには、重臣も居住していたと思われ、「爰ヲ有沢屋敷ト云」・「土肥殿此存所ニモ居住アリシ由ニテ今ニ村ノ内ニ館跡アリ」と記載されている。

また、『三州志』は旧伝によるとして「本丸東西二十八間、南北六十八間。一作五十八間。礪間二間也。別ニ東へ四間西へ四間ノ深池アリ」と記している。これは、本城全体を示した長さとも思われる。

城の西側を流れる白岩川（日中川）は、重要な要害であるとともに交通の便を提供していたと思われ、舟着場の名が残る。この白岩川から城までの間は「フケ田」（沼田）となっている。また、川岸から城内をぬけて柿沢・館村などに通ずる道が数条描かれている。城は、最終的に堀・土塁をめぐらした郭をいく重にも設け、防御力を強めた近世の平城的性格をもつ城郭として整えられたと推測できる。

（酒井）

註① 日置莊・井見莊・弓庄城・土肥氏についての文書資料は、『立山町史』〔米沢他1977〕、『日本城郭大系7』〔高岡1980〕、『白岩川流域の歴史的事実』〔石原1956〕、『富山県史』「史料編中世II」〔富山県1975〕に詳しい。また参考・引用した文書は、これらの文献によるところが大である。



第2図 弓之庄古城之図（土肥家記より）

## II 調査の概要

### 1. 調査の経緯

昭和55年度、上市町柿沢・館地内で、団体營ほ場整備事業が実施されることになった。同地内には、その名が示すように町指定遺跡弓庄城跡がある。そこで、上市町教育委員会は、国庫・県費補助金の交付を受けて遺跡の範囲・状況などを把握することを目的とした試掘調査（第1期調査）を実施した。その調査結果をもとに、同教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・地元土地区画整理組合が、工事計画との調整をはかるための協議を行なった。協議の結果、調査対象地区約3万m<sup>2</sup>のうち南側約1万m<sup>2</sup>の大半が保存された。しかし、一部に対して記録保存を前提とした発掘調査（第2期調査）を実施することになった。また、北側部分約2万m<sup>2</sup>は、昭和55年度内の工事計画を中止し、56年度に一部の記録保存調査・工法・計画の変更により遺跡の保存措置を講ずるよう三者の協議が継続されている。

### 2. 第1期調査

調査地区は、白岩川に面した河岸段丘上の約3万m<sup>2</sup>で、後に弓庄城跡の西側外郭部にあたると推定した地区である。調査は、対象地区全体に2m×2mのグリッドを組み、中世の建物等の遺構検出を考慮した幅3mのトレーニングを基本として約20m間隔に発掘区を設けた。しかし、調査対象地区内は、一部の工事がすでに実施され耕土が数ヶ所に盛り上げられており、その部分は、調査できなかった。また、調査は、対象地区内の北東部から南に向って、随時行った。その結果、遺構は、ほぼ全体で検出でき、現在の水田・水路・段丘の起伏と一致して検出でき、良好な依存状態を示した。このように、弓庄城は後世の改田がかなり行なわれているにもかかわらず、水田の区画・用水等の位置・地形から、城跡の規模を推定することができると考えられる。発掘面積は、2,500m<sup>2</sup>である。

**立地** 弓庄城は、白岩川に面した河岸段丘東岸に立地する。この河岸段丘は、東西の幅約500mで南北に細長く延び、緩く傾斜している。また、東方は段丘上に接して山地が後背し、自然の要害となっている。この段丘上には、数段の小段丘面（比高差2~3m）がみられる。その自然地形を利用して、東西約200m、南北約500mにわたって城が築かれたと推測できる。段丘の標高は、45m~53mを測る、北東方向を見わたすことができる。

**発掘区の区割**（第3図） 遺構は、自然地形を利用し、弓庄城の各郭がつくられたと考えられた。そこで発掘調査後、掘切と考えられる溝と地形の高まりなどを参考に八区に分けた。

- 1区 調査地区的東側を通る町道に面する高台で、下位面から約2mの比高差をもつ。
- 2区 1区西側の下位面にそって、1区西側から5区東側にそって掘り込まれた幅5~10mの堀状の部分を示す。
- 3区 5区東側で2区の対岸の平地。5区との比高差は1~1.5mを測る。また、土星状の高まり約30cmが西・南側にめぐる。
- 4区 3区東側の同一平坦地上で、3・4区の間は、幅1mほどの溝で区切られる。また、5区とは、2区をはさんで約2mの比高差をもつ。3・4区とも段丘上の最下面に位置する。
- 5区 北側を2区に囲まれ、1区と、3・4区の中間にある平坦地で6から8区と同一面となる。
- 6区 町道に面した南東側の一画で、石敷遺構を中心とした部分で、北側は、溝SD02により区切られる。
- 7区 5区の平坦地の南側部にあたり、溝SD02によって区画される北側を7区とした。
- 8区 7区同様で、6区の西側・溝SD02の南側にあたる部分。

（酒井）

**1区（第4図4・5、第5図）** レンチ北端と中央部で、褐色砂礫層を50cm~70cm掘り込む溝を確認した。トレーニング北端の溝は、現在も用水の一部として、その形を残しており、郭間を区切る溝としての性格を持つものであろう。

出土遺物には、珠洲、越中瀬戸、瀬戸・美濃、伊万里の各系統の陶磁器、土師質土器、中国製陶磁器、砥石がある。

いずれも破片で、出土量は少ない。①は、鉄軸を施す瀬戸系陶器の皿で、ケズリ出し高台を有する。⑩は、青磁楕の底部で、同安窯系のものであろう。㊂は、手づくねの土師質小皿で、口辺部の一部に煤が付着し、燈火器として使用されている。㊃は、泥岩質の石材を縛使いし、上端へ組かけ用の穴を施す。

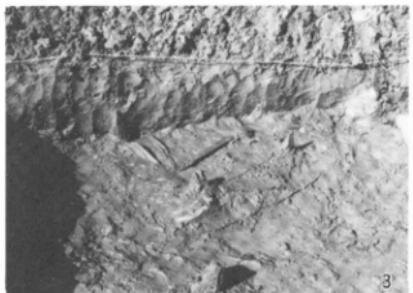
## 2区(第4図4・5、第5図)

1区から5区に続くと思われる堀を確認した。最深部は地表下2m以上で、覆土内には黒色土が入る。

出土遺物には、珠洲、越中瀬戸、瀬戸・美濃の各系統の陶器、土師質土器、中国製陶磁器と鉄滓がある。いずれも破片である。②・③は、鉄軸が施される瀬戸系の楕体部、壺口縁部である。④は、青磁楕の体部片で、体外面にシノギハ文、同内面に草花文を施す。釉調は淡緑色を呈し、龍泉窯系のものであろう。⑧は、中国製染付磁器の楕口縁部



第3図 地形及び区割図 (1/2,000)



片で、内面にはいわゆる菱彫文を、外面に雷文を施す。②・③は、土師質の小皿・杯で、いずれも手づくねである。他に底部外面に回転糸切り痕を残す土師質小皿もある。

### 3区（第4図1～5、第5図）

土壘状構造・柱穴・井戸を確認する。井戸は、井戸枠を確認した。一辺約1.5mの方形で、四隅に支柱を持つものであろう。三辺から柱根を検出した。

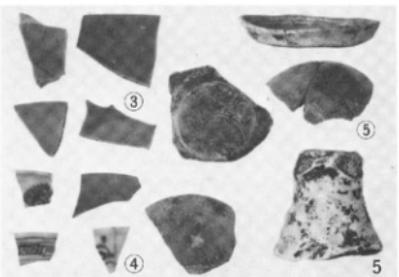
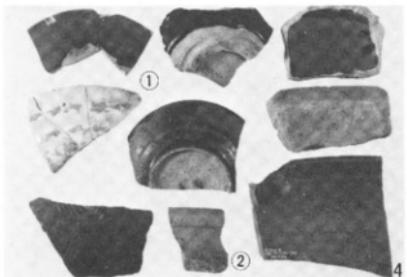
出土した遺物は、珠洲、越中瀬戸、瀬戸・美濃、越前などの各系統の陶器、土師質土器、中国製磁器と鉄滓である。

珠洲は、擂鉢片が多い。体内部におろし目を施さない⑧・⑨、体内部へ荒目の櫛を引く⑩、口辺部に櫛目波状文を施す（4の②）がある。前二者は、珠洲第Ⅰ・Ⅱ期、後者は、同Ⅳ期に属する〔吉岡 1976〕ものであろう。また、頸部に櫛目波状文をめぐらす壺⑪、玉縁の口縁を持つ壺もある。

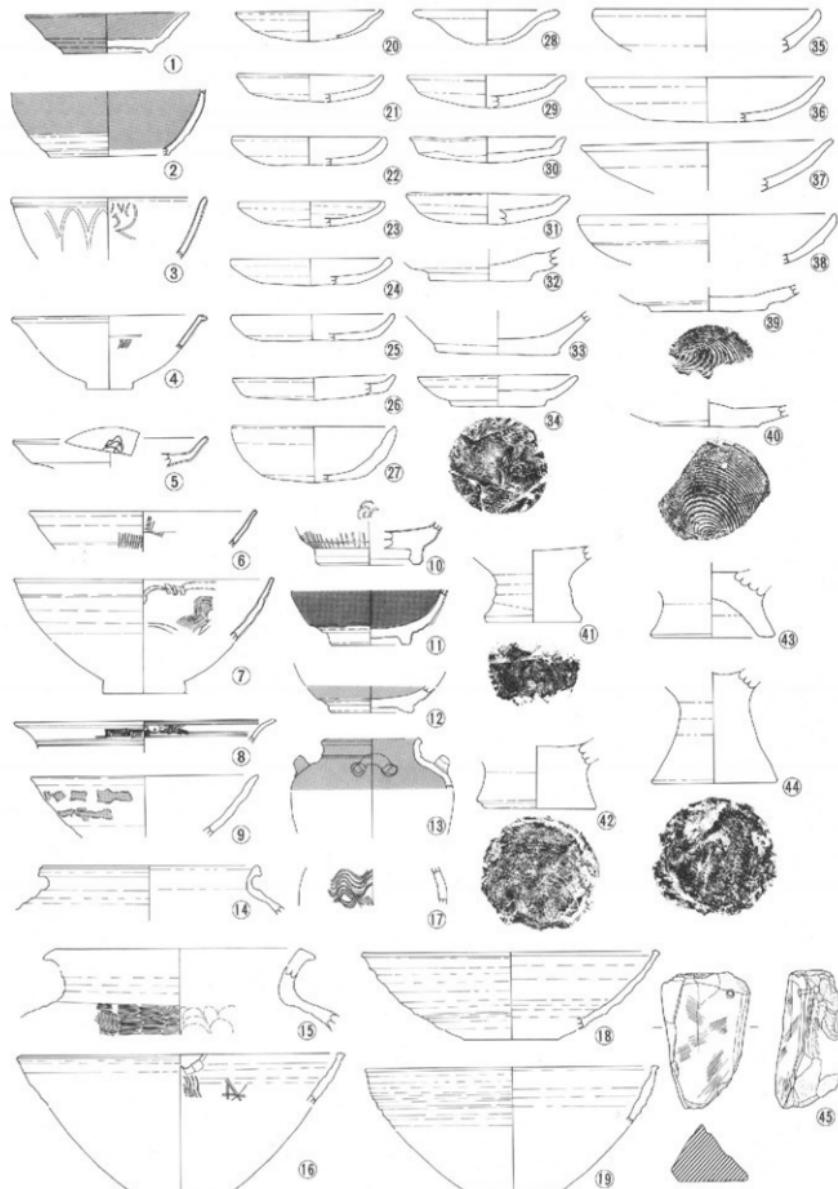
瀬戸系陶器は、櫛⑨・⑪・⑫、小皿（4の①）がある。⑨は、黄緑色灰釉、⑪は、黒褐色鉄釉、他は、茶褐色鉄釉を施している。

土師質土器は、口径9cm前後と15cm前後の皿がある。形態的には、体部が丸みをもってひらく⑬～⑯、体部の上部が屈曲してひらく⑰～⑲の二者がある。また、底部外面に回転糸切り痕を残す⑳～㉓、㉔・㉕があり、前者は手づくね、後者はロクロ引のものであろう。㉖～㉗は、高台片で底部外面に回転糸切り痕を残す。おそらく㉘～㉙の中のものが上に付いた高台付きの皿になろう。

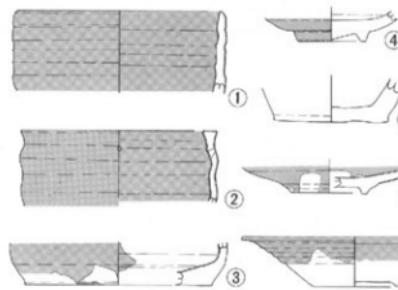
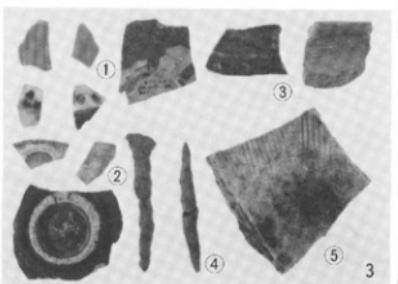
中国製磁器は、白磁櫛④と青磁櫛⑥・⑦、皿⑤がある。⑥・⑦は、暗緑色の釉調を呈す同安窯系のもので、体内部にヘラ・櫛状工具による文様を施す。⑤は、淡緑色の龍泉窯系のもので、底部内部にヘラ状工具による文様を施す。（神保）



第4図 1～3図 1. 3区遠景（南より） 2. 3区土壘及び溝 3. 井戸検出状況 4. 5. 1～3区出土  
遺物 (1/3)



第5図 1～3区遺物実測図 1区(1)・(10)・(18)・(19)・(20)・(21)・(22)・(23)・(24)・(25)・(45) 2区(2)・(3)・(8)・(13)・(20)・(27) 3区(4)～(7)・(9)・(11)・(12)・(14)～(17)・(26)・(28)～(44) (1)～(13)・(20)～(45)(1/3), (14)～(17)(1/6)



#### 4区(第6図)

4区は、段丘上の最下面に位置する。調査は、4区中央部に長さ40m・幅3mのトレーナー1本とそれに直行するトレーナー長さ8m・幅1mを設けた。

遺構は、柱穴・土塙・溝などを検出した。柱穴は、三~四回の重複をもって多数検出できた。また、柱穴には柱根の部分が中空となるものがあり、近年まで柱根が残存していたと思われる。東側の直行トレーナーでは、幅1mの溝を検出した。

出土遺物は、珠洲・越前・越中瀬戸・瀬戸・伊万里の各系統の陶磁器類・土師質土器と中国製磁器(青磁・染付)がある。その他に鉄製の釘が4本出土した。

瀬戸系のものは、鉄釉を施す①・②・④・⑥・⑦と、灰釉を施す③・⑤がある。また、器種は、碗①・④、小鉢②、小形壺③・⑤、皿⑥・⑦がみられる。

碗は、口縁部が底部より直立する①と天目茶碗④がある。②は、口辺部が肥厚し有孔される小鉢。皿は、ゆるく外開きの器形で削り出し高台が付く。また、③の③は、瀬戸鉄釉の瓶子肩部片で、釉はあめ色を呈する。②・⑥・⑦は、越中瀬戸、①・③・④は、瀬戸と思われる。瀬戸には、淡灰色のきめの細かい胎土と黄褐色のきめの荒い胎土の二者がある。

珠洲は、数点出土している。⑩は、横に数条と、縦に一条の線が入るたたき目を施す壺肩部である。その他に擂鉢・甕の破片がある。越前は、擂鉢が二点出土し、おろし目の条線が両者で異なる。土師質土器皿は、底部に糸切痕を残す。⑨は、内面に朱書きがある。判読はできない。

青磁は、小片が二点出土している。③の①は、線刻によりシノギハ文様を施した碗と思われる。釉は、気泡を生じ淡青緑色を呈する。

(酒井)

第6図 4区 1. 4区遠景(南より) 2. 柱穴検出状況 3. 出土遺物(1/3) 4. 遺物実測図①～⑩(1/3)  
・⑪～⑫(1/6)

5区（第7図）

遺構は柱穴群・土塙・溝が検出された。柱穴群は北側において比較的散漫に分布しており、数棟の建物が確認された。すべて縦柱で、規模は大きなものでは5間×2間以上のものがある。さらに数棟の建物の存在が予想される。南東側のトレンチでは柱穴が密集して確認された。重複している柱穴もかなりあり、建て替えが行なわれた複数の建物の存在が考えられる。また、当区の北側を幅数mの堀状の溝が東西に走っており、他区域との区画が意図されていた可能性がある。

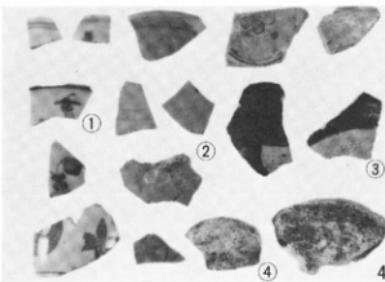
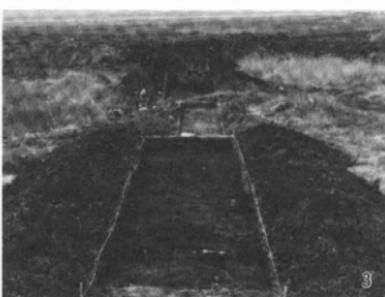
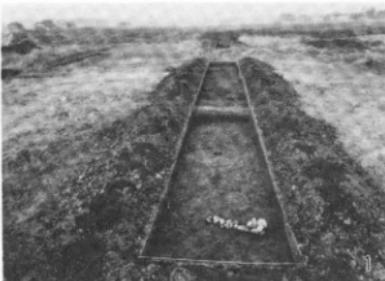
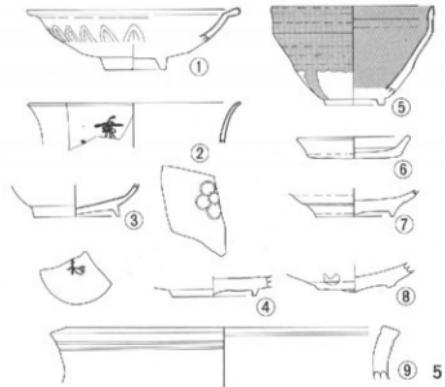
出土遺物は越前・越中瀬戸・瀬戸・美濃・伊万里などの各系統の陶磁器類、土師質土器、青磁・白磁・青白磁・染付などの中国製磁器が出土している（4・5）。

瀬戸・美濃系陶器には皿・椀がある。皿（5の④・⑦・⑧）は削り出し高台がつく。⑦と⑧は内面が摩滅しており、特に⑧は高台の摩滅が著しい。釉は⑦に鉄釉、④・⑧に灰釉が施されている。椀には体部が直立するものと天目茶碗（5の⑤）がある。⑨は越前の甕である。

青磁には椀がある（5の①・④の②）。①は口辺部が外反し、体部にシノギハ文が施されている。龍泉窯系の製品と考えられる。染付も椀の形態をとる（5の②・③）。②のように口辺部がゆるく外反するものが数例ある。②の体部上半、③の外底面には文字が記されているが判読できない。

土師質土器には皿がある（5の⑥、4の④）。平坦な底部から小さく外反し立ちあがるものと、底部から口辺部にかけてゆるく外反するものがある。

（奥村）



第7図 5区 1. 5区遠景（南より） 2. 建物検出状況 3. 建物検出状況 4. 出土遺物（1/3）

5. 遺物実測図①～⑧(1/3), ⑨(1/6) - 9 -



6区(第8・9図の1・2)

6区は、石敷の遺構を中心として柱穴・溝・池などが検出された。石敷は、南北約50m、幅約5mの規模で、中央部は、一辺約8m、深さ80cmの隅円四辺形の池となる。池の東側は、柱穴・溝が検出でき、建物等の存在が推測できる。また、石敷は、みられない。

石敷は、30cm前後の河原石をならべ、その上に礫を敷きつめ、平坦面を作る。道路であろうか。

遺物は、珠洲・越前・越中瀬戸・瀬戸の各系統の陶器類・土師質土器と青磁・白磁・染付などの中国製磁器が出土している(第9図2の1・3)。



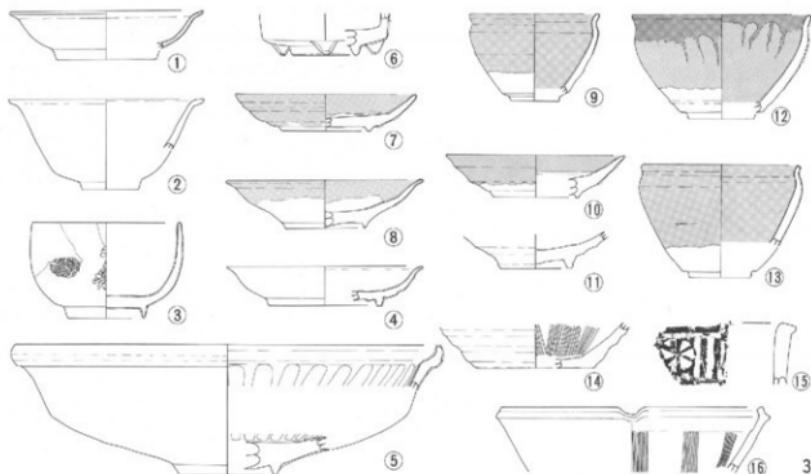
2

瀬戸系陶器は、皿・天目茶碗等がある。皿は、口縁部が逆八の字状に開く⑧・⑩と、丸みをもって口縁部が開く④・⑦がある。前者は、断面逆三角形の削り出し高台が付く、後者は、角ばった高台が付く。⑧・⑩は、越中瀬戸、④・⑦・⑪は、瀬戸であろう。釉は、鉄釉の⑩・⑪と、灰釉の⑦・⑧がある。皿は、内面・高台部分が摩り減ったものが目立つ。

天目茶碗は、小型の⑨と大き目の⑫・⑬がある。釉がかりは良く茶色の光沢のある色調を呈する。

擂鉢は、越前のもの⑮と越中瀬戸の⑯がある。

⑯は、瓦質土器で二点が出土している。その他に、砥石が二点出土している。



第8図 6区 1. 石敷遺構(北より) 2. 同(南より) 3. 遺物実測図①～⑬・⑯(1/3), ⑭・⑮(1/6), ⑯(1/6)

中国製磁器（第8図3）は、白磁①・②、青磁⑤・⑥、染付③がある。

①は、皿で底部からゆるく内湾して口辺部が小さく外反する器形で、明るい白灰色を呈する。②は、底部からゆるく内湾して立ち上り、口辺部がくの字状に外反する器形で濁白灰色を呈する。口辺部には、釉だまりがみられ、断面に漆が付着する。

青磁は、大盤⑤と香爐⑥がある。⑤は、陰刻によるシノギハ文様の大盤で、口辺部は、くの字状に外反し、端部を垂直につまみ上げている。釉は、淡緑色で厚く施釉される。内底面部の露胎部分・胎土内には赤色を呈する部分がある。

⑥は、香爐底部片で、深緑色の釉が厚く施される。また、釉は、気泡を生じている。胎土は、⑤が白色の粗いもの、⑥は、淡灰色を呈する。いずれも龍泉窯系であろう。（酒井）

#### 7区（第9図3）

当区は、6区に隣接した西側の水田部分である。一帯の表土は、調査前には場整備事業が一部施工されたためない。調査では、幅3mのトレンチを南北方向で三本設定し、遺構の有無を確認した。

検出した遺構は、溝・柱穴・土塙で、いずれも黄褐色砂礫層に掘り込まれている。覆土は、暗褐色・黒色を呈し、前者では砂礫層の石がぬけた跡と判断しがたいものも見られた。

検出した遺構のうち溝は、幅80cm~1mもので東西方向に流路を持ち、当区と8区を区分する意図的な配置が考えられる。

出土遺物としては、瀬戸系陶器の皿・碗や珠洲、越前の甕・擂鉢、土師質小皿、中国製磁器（青磁・白磁・染付）の碗がある。いずれも破片で、出土量は少ない。

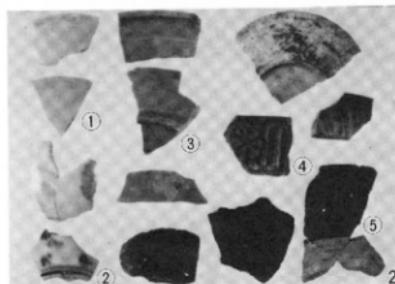
#### 8区（第9図4）

7区の北側へ続く一帯で、前区と同様に表土層が堆土されていた。調査では、幅2mのトレンチ一本を設定した。

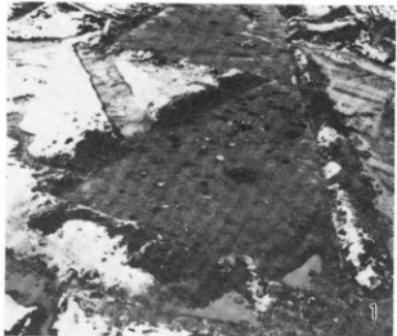
検出した遺構は、溝・柱穴・土塙である。7区と同じく、黄褐色砂礫層に掘り込まれている。

溝は、8区のほぼ中央を南北に流路を持ち、一帯には、多数の柱穴・土塙が見られる。当区及び7区一帯には、溝によって区別された建物群の存在が推測される。

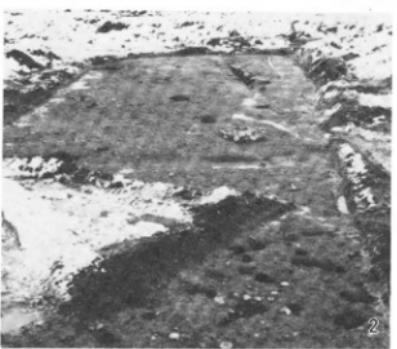
出土遺物は、珠洲の擂鉢、瀬戸系陶器の皿・碗、中国製白磁碗と他に、磁石がある。出土量は少なく、いずれも破片である。（神保）



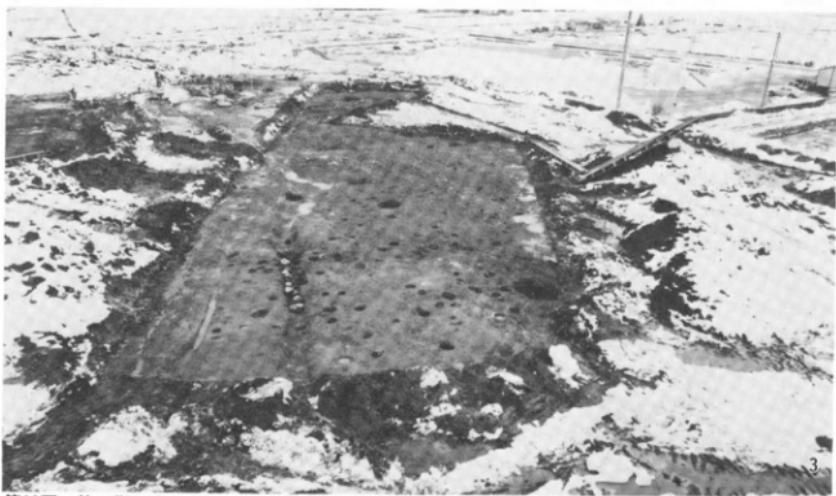
第9図 6~8区 1. 池跡（東より） 2. 6区  
出土遺物（1/3） 3. 7区遠景（北より） 4. 8区  
溝検出状況（北より）



1



2



3

第10図 第2期調査 1～2. 発掘区遠景（南より） 3. 発掘区全景（北より）

## 2. 第2期調査

調査は、南側部分のうち、設計変更のできない二地点に対して実施した（第3・13図）。両地点は、水田計画線に従うため、南北に伸び、7・8区にまたがる。

調査は、昭和56年12月8日から24日（12日間）まで実施した。両地点の耕土・盛土は、機械で堆土した。西側の調査区は、5日間で遺構検出を行い、10日から図化・写真撮影作業に入り、26日で終了した。発掘面積は、約500m<sup>2</sup>である。東側の調査区は、11日から西側と同様に始めたが、調査中に数回の降・積雪をみたため、作業を一時中断し、残された作業（図化・写真撮影など）は翌年の雪解けを待って開始する事とした。溝S D02は、完掘できたため、平面図を作成した。発掘面積は、約900m<sup>2</sup>である。総発掘面積は1400m<sup>2</sup>となった。

調査の結果、建物一棟、柵列・井戸五基・溝六条などを検出した。これらの時期は、中世と思われる。遺構は、調査区全体でみられ、中でも、井戸と溝は北西部に集中している。遺物は、調査区に散在してみられた。S D02・S E09からは、遺物が多数出土し、他はほとんどみられなかった。S D02からは、甲冑が出土し注目される。遺物の中心となる時期は、南北朝時代であるが、新・旧両時期のものが、混在してみられる。遺構検出面は、褐色粘質土・黄褐色砂礫層の二面がみられ、後者は調査区のほぼ全域でみられた。

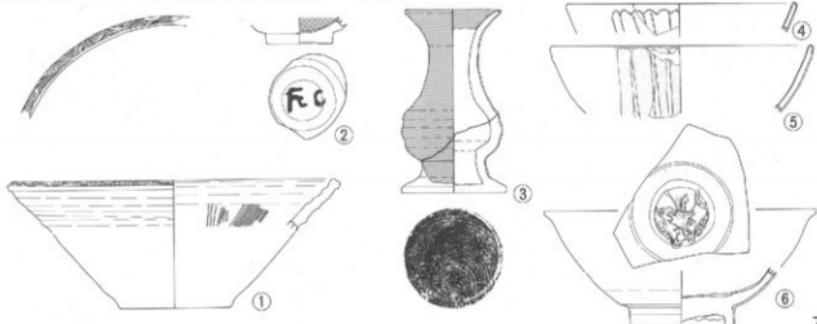
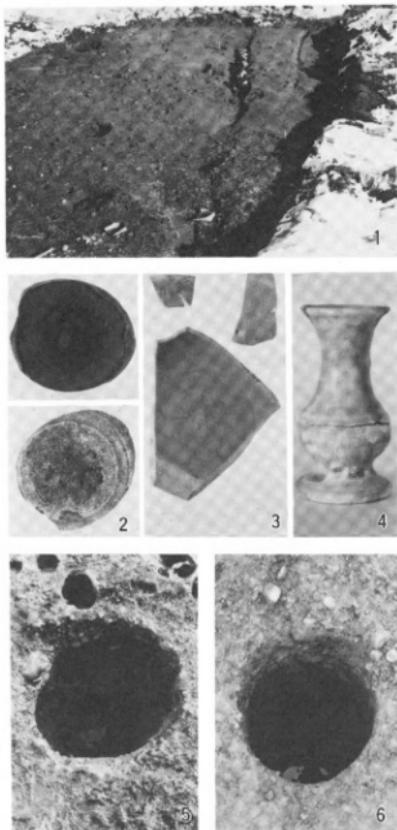
（橋本）

### a. 遺構

建物（第13図）確認できる掘立柱建物は、一棟ある。建物S B19は発掘区の南側に位置し、柱間は、2間×1間のものである。この建物は、溝S D02とS D05によって区画された地域に存在している。この他に、S A22をはじめとして、二ヶ所の柵列があるが、どの施設に関係するのか把めなかつた。

現在、確認できるのは、上記の通りであるが、この他にも柱穴が検出でき、重複関係を持つものもあるので、時期的に異なる建物が、まだ数棟検出されるものと思われる。また、これらの柱穴群は、溝S D02などにより区画されると考えられる。この他、井戸・溝・建物・柵列の関連は後日に再検討したい。

井戸（第11図①～⑥）井戸は、S E07をはじめ5ヶ所で検出できた。いずれも素掘りで、人頭大の石が詰まり、人為了に埋められたものと思われる。S D01は、S E07をさけて掘られており、同時期と考えられる。また、S E10は、S D02内にあるが、両者の新旧関係は把めなかつた。遺物はS E09で、中国製の天目茶碗（②）瀬戸・美濃系の灰釉花瓶（③）、青灰色の青磁碗（④～⑥）を、S E11では、珠洲の擂鉢（①）を、S E10では井戸枠と思われる切り石が出土した。②は高台底に朱書きの文字を残すが判読できない。③は漆による修理痕があり、底部に糸切り痕を残す。④・⑤は釉が薄く、陰刻されたシノギハ文が施されている。⑥は釉が厚く、内底面には花文スタンプが施されている。①は、口唇部に柳目波状文が施され、擂目は、やや荒い。珠洲第Ⅳ期〔吉岡 1977〕のものと思われる。（高慶）

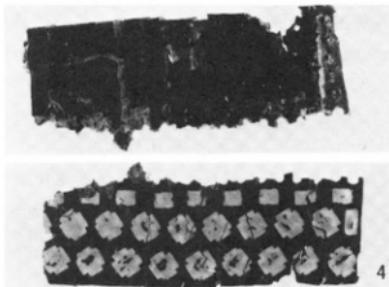
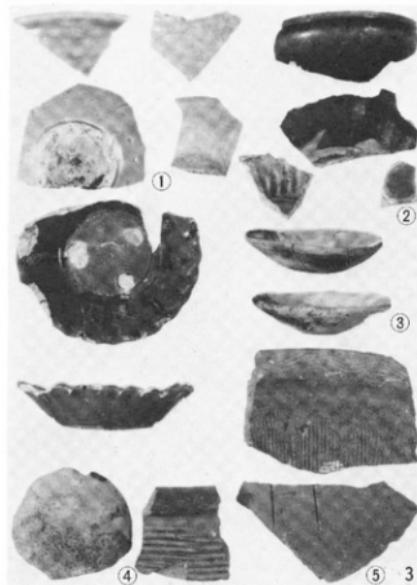


第11図 井戸 1. 発掘区遠景 2. 3～4 S E09出土遺物・2(1/2)・3(1/3) 5. S E09 6. S E07

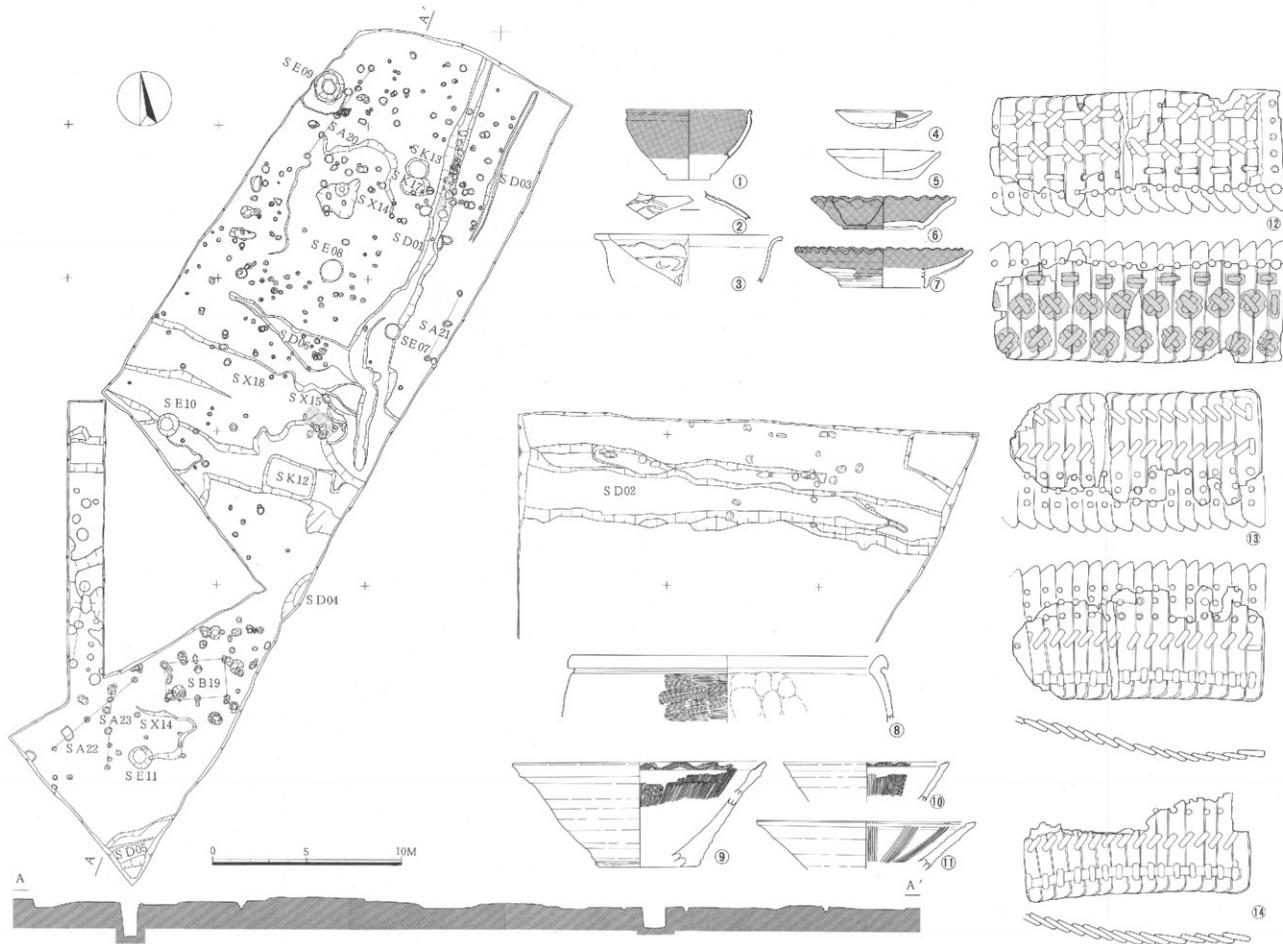
溝（第12～16図）

溝 S D02は、西流し幅 2～5 m、深さ0.3～0.7mの規模を持つ。断面形は、「一」字形を呈し、東側では壁面に段を持つ。溝の西側は、浅くなり、穴SK10・井戸SE10と重複する。SX18は、溝と平行し石敷部分SX15を持つ。これは溝と一連のもの（土堤）とみられる。遺物は、土器・石器・甲冑がある（第12・13図）。①～③は青磁（中国製）、④・⑤は土師質小皿である。⑥・⑦は瀬戸系陶器小皿で、⑧は破片を漆で接合している。⑨～⑩は珠洲であり、⑪は大甕、⑫は擂鉢である。⑬は越前の擂鉢である。珠洲の主体となる時期は、第Ⅲ・Ⅳ期〔吉岡 1976〕で、越前（15世紀以降）・瀬戸系陶器は、珠洲に後続する。SD02の覆土内には、時期の異なる遺物が混在してみられる。

SD01は、SE07付近で広がり、分岐してSD06となる。溝の北側では、幅・深さが一定し、約8mに渡り人頭大の石が見られた。SD01・03・05・06は、SD02より浅く小さな溝である。SD03は、SD01と平行して北流する。これらの溝からは、遺物が若干出土しただけである。溝の時期は、中世に属するが、時期幅を持つと考えられる。（橋本）



第12図 溝 1. SD01 2. SD02 (西より) 3. SD02出土遺物 (1/3) 4. SD02出土甲冑 (1/2)



第13図 第2期調査発掘区（1/200）及びSD02出土遺物実測図 ①～⑦(1/3), ⑧～⑪(1/6), ⑫～⑯(1/2)

### b. 遺物

出土遺物は、瀬戸・美濃・越中瀬戸・珠洲・越前・伊万里など各系統の陶磁器類、土師質土器、中国製磁器（青磁・白磁・染付）などがある。

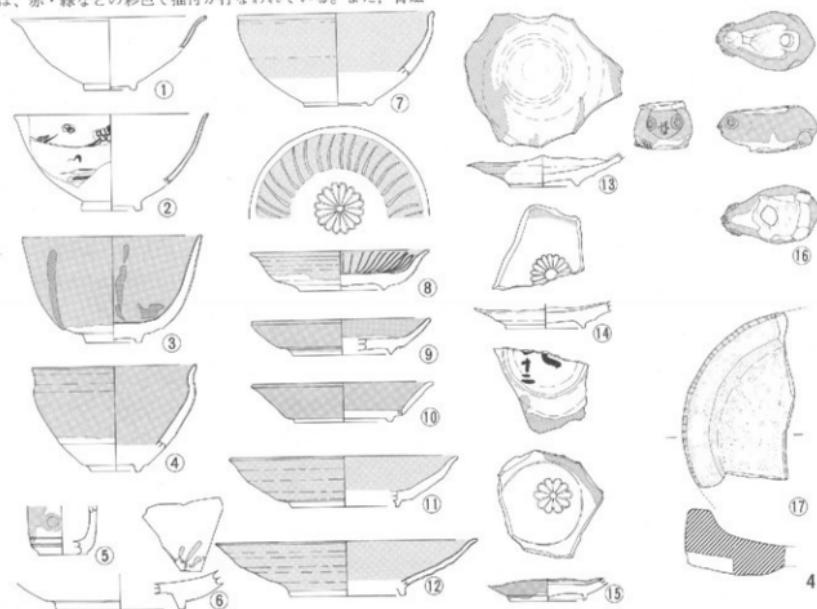
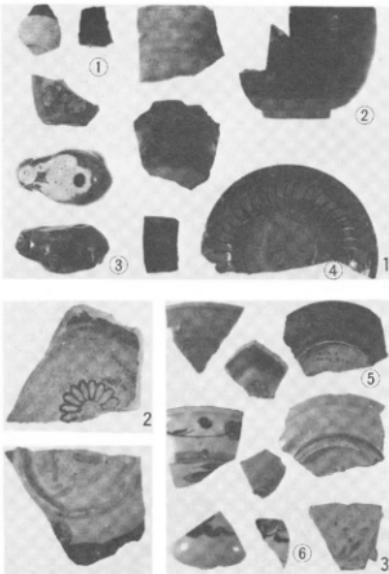
瀬戸・美濃系土器は、天目茶碗③・④、楕⑦、小皿⑧～⑯、香爐、茶入⑤、水滴⑩、甕などがある。

茶碗は、底部から立ちざみに外反する③とゆるく外反し、口辺部にくびれをもつ④・⑦がある。⑦は、灰釉が施され淡緑灰色を呈する。小皿は、底部からゆるいカーブで内湾し口辺部がぐの字状に外反する⑧～⑯と、やや大きめで口辺部が外反しない⑩がある。⑨・⑯は、鉄釉で茶色を呈する。⑧・⑪・⑯は、灰釉が施される。また、内面に印花文をもつ⑧・⑭・⑯がある。⑪は、器面全面に灰釉が施される。⑯は、逆いの字状に口縁が開くもので、鉄釉が施す。

⑩は、底面に「□□十二」と墨書きされる。

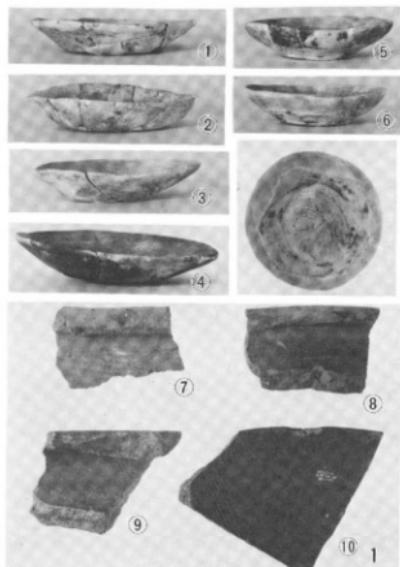
⑤は、鉄釉の茶入である。⑩は、うさぎを形取った水滴で上下の面は、磨かれている。釉は、鉄釉であめ色を呈する。

中国製磁器は、白磁の楕①と染付の楕②・皿⑥がある。⑥は、赤・緑などの彩色で描付が行なわれている。また、青磁



第14図 第2期調査出土遺物 1. 瀬戸系陶器 (1/3) 2. 墨書き土器 (1/2) 3. 中国製陶器ほか (1/3)

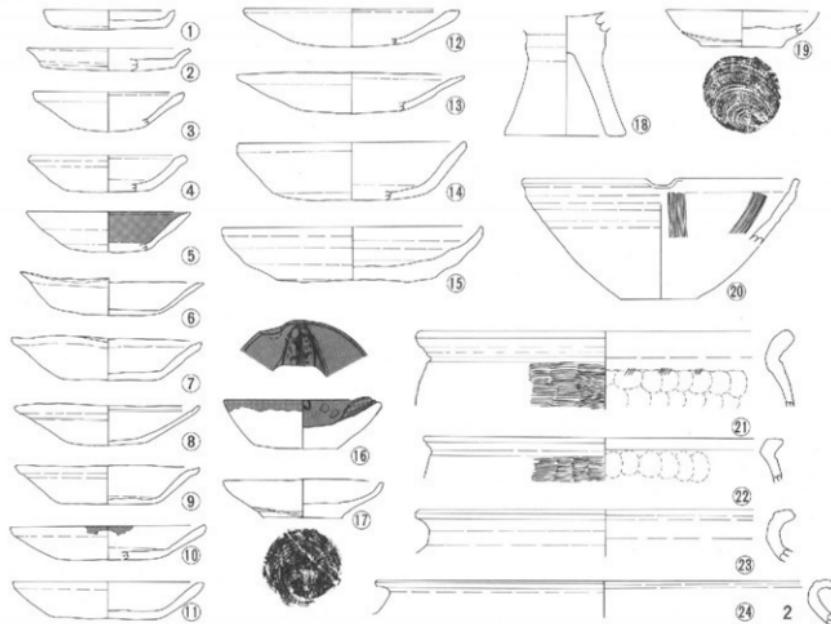
4. 遺物実測図①～⑯(1/3)・⑰(1/6) — 17 —



は、小片が数点出土している。

土師質土器は(2の1~19)2の、口径10cm・12cm・15cm前後の皿が三種類ある。器形は、平坦で厚い底部から小さく外反し、立ち上がる①・②と、底部からゆるく外開きとなる③~⑯・⑰・⑲がある。また、底部に系切痕を残す⑮や⑯がある。口径10~12cm前後の皿は、薄作りで口クロ引きと思われ、外面にナデ痕を残す。作りは、稚である。⑯は、厚手の作りで、内部に燈芯の台が付く。外面は、油煙が厚く付着し、燈芯が炭化して残る。底部は、平坦面を作り出すため磨かれている。大型の皿は内面で凸凹し、手づくねにより作られたと思われる。口縁部には、横ナギ調整が施される。⑰は、高台付きの皿(台部分)と思われる。高台は、円錐形の内部をえぐり出して作られる。

珠洲は、播鉢・甕がある。播鉢⑱はおろし目を數条施し作りは丁寧である。甕は、口縁部がふくれて外反する⑲・⑳と、口縁内面に太い沈線を一~二条もち、外曲する㉑・㉒がある。前者が珠洲第Ⅲ期、後者が珠洲第Ⅰ期



第15図 第2期調査出土物

1. 土師質土器、皿、珠洲(1/3)
2. 造物実測図①~⑯(1/3)・⑰~㉔(1/6)

に属すると思われる〔吉岡 1978〕。

その他に、縄文時代中・晚期（第16図 1）に属する土器・石器と平安時代と思われる須恵器が少量出土した。また、銅鏡（第16図 4～6）が三点採集されている。（酒井）

### III まとめ

#### 1. 甲冑〔第13図 14, 16図〕

甲冑は、四段分の断片を検出した。小札は、革地を漆で塗り固めているが今は中空で、漆部分が残る〔笹間 1973〕。

小札の札頭は、厚く漆で盛り上げられ札足 7 cm・札幅 1.5 cm を測る。残存する最も大きな破片で小札十八枚（約15cm）を数える。小札は、草ひもで横に縫い綴り一段の板を作る。また、漆で塗り固め、ゆるく渦曲する一連のものとしている。小札板には、七ヶ所に打ちぬきの穴があけられ下縫いに四孔・毛立の穴・威毛に、三孔が使われる。

縫い方は、表側で右下り斜めと縦位の革ひもがみられ、縦ひもの下には、横へ一条通す（第13図13・14）。裏側は、左下り斜めと右下り斜めとなる他の二段分の断片も、同様の縫い方となる。

他的一段分は、小札を横へ菱縫いに綴ってゆき、その上から黒漆で塗り固め、朱漆により菱・畦目を描いている。残存部から推定すると小札は、六孔で下縫いに五孔・毛立の穴に一孔が使われる。下縫いは、裏表とも菱縫いに綴っている。また、小札は、中空で漆部分が残ることや、甲冑の要所に鉄札板が使用されるが、四段のいずれにも鉄製のものがみられないことから、この甲冑片は、四段とも革摺と考えられ、描菱される一段は、摺板であろう。

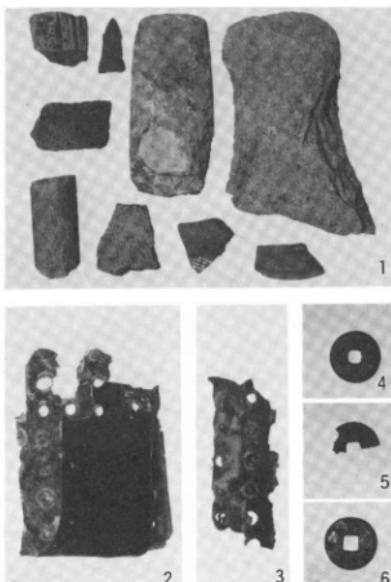
以上の特徴をもつ甲冑片は、胴丸・腹巻とよばれる甲冑に見られる手法をもつが革摺部分だけでは、両者のいずれか断定できない。

甲冑は、鎌倉時代以後に用いられる小札の漆による塗り固め、南北朝時代以後に用いられる描菱、胴丸・腹巻などの流行する室町時代頃、また、札足・札幅の小形化などの特徴をもつ。

以上のことから、室町時代より古くなることはないであろう。むしろ、小札板の小形化（1.5cm）などを考え合せると、室町時代でも後半に位置づけておきたい。

#### 2. 弓庄城出土の遺物からみた年代について

出土遺物は、層位的に検出できたわけではなく各時代の遺物が混在して出土している。出土陶磁器には、珠洲・越前・瀬戸・美濃・越中瀬戸・伊万里など各系統の陶磁器・土師質土器や中国製陶磁器（青磁・白磁・染付・天目茶碗）がある。これらの陶磁器類を比較的編年作業の進んでいる珠洲の編年〔吉岡 1977〕に合せると、第Ⅰ期（平安時代末）から第Ⅳ期（室町時代）のものが出土している。吉岡氏によれば、「第Ⅳ期以後珠洲は、しだいに衰退してゆき15世紀以後は、生産されなくなり、越前などに取って変わる」〔吉岡 1978〕としている。この現象は、弓庄城出土の珠洲・越前の関係にも現われるようだ。また、出土する珠洲は、第Ⅲ期から第Ⅳ期（14～15世紀）に位置づけられるものが多い。第Ⅰ期に位置づけられるものとの比率は、3：1ほどである。



第16図 第2期調査出土遺物 1. その他の遺物  
(1/3) 2～3. 甲冑 4. 洪武通貨 5. 聖宋通宝  
6. 寛永通宝 4～6 (1/2)

瀬戸系の陶器には、瀬戸・美濃と越中瀬戸がある。瀬戸・美濃の編年は、判然としないが、越中瀬戸は、その開窯時期がほぼ定められる。しかし、開窯時期については、文禄二年の「彦右衛門」(1594年)とする説〔山本 1934他〕と、尾張の陶工「小二郎」による文禄一年以前に開窯されたとする説〔定塚 1974〕がある。越中瀬戸は、瀬戸・美濃と同一系統の陶器で近似性が強くみられる。そのことは、開窯時の陶工を瀬戸・美濃などから引き連れて来たことにも裏づけされよう。越中瀬戸は、開窯頭初前田氏などを需要の主体とした茶器・皿などを生産し基礎が作られた。また、一々二基の窯窓での生産は、多いものではなかつてであろうし、後に主体となる雑器を量産するのは、江戸時代中ごろからである。そして、越中瀬戸の開窯期とされる天正～文禄年間の越中は、上杉・織田・羽柴などによる戦乱に巻き込まれ、平定されるのは文禄年間になってからである。このことは、越中瀬戸の開窯にも影響をあたえたと思われる。このことから開窯は、前田氏の越中支配が確立したころと考えたほうが妥当と思われ、出土する越中瀬戸は、16世紀末以後の遺物と考えたい。以上のことから弓庄城から出土した遺物は、12世紀末から17世紀ごろまでに至る。

文献から弓庄城の築城を推測すると、土肥氏の越中入国とほぼ時期を同じくその原形(館など)が築かれたとして14世紀中ごろから、16世紀後半(1583年)に城を開け渡すまで約250年ほど存続したこととなる。しかし、出土遺物には、17世紀ごろに位置づけられるものもあり、城もしくは集落が存続していたと思われる。また、珠洲より年代をみると12世紀から15世紀に至る時代幅をもつ。このことは、12世紀末から14世紀前半の遺物は、弓庄城築城以前の遺物となり、築城以前にその母体となるものの存在を加味しなければならないであろう。それは、現在の立山町日中(白岩川の対岸)にあったとされる式内社日置社とその領、日置荘との関係を有すであろう。

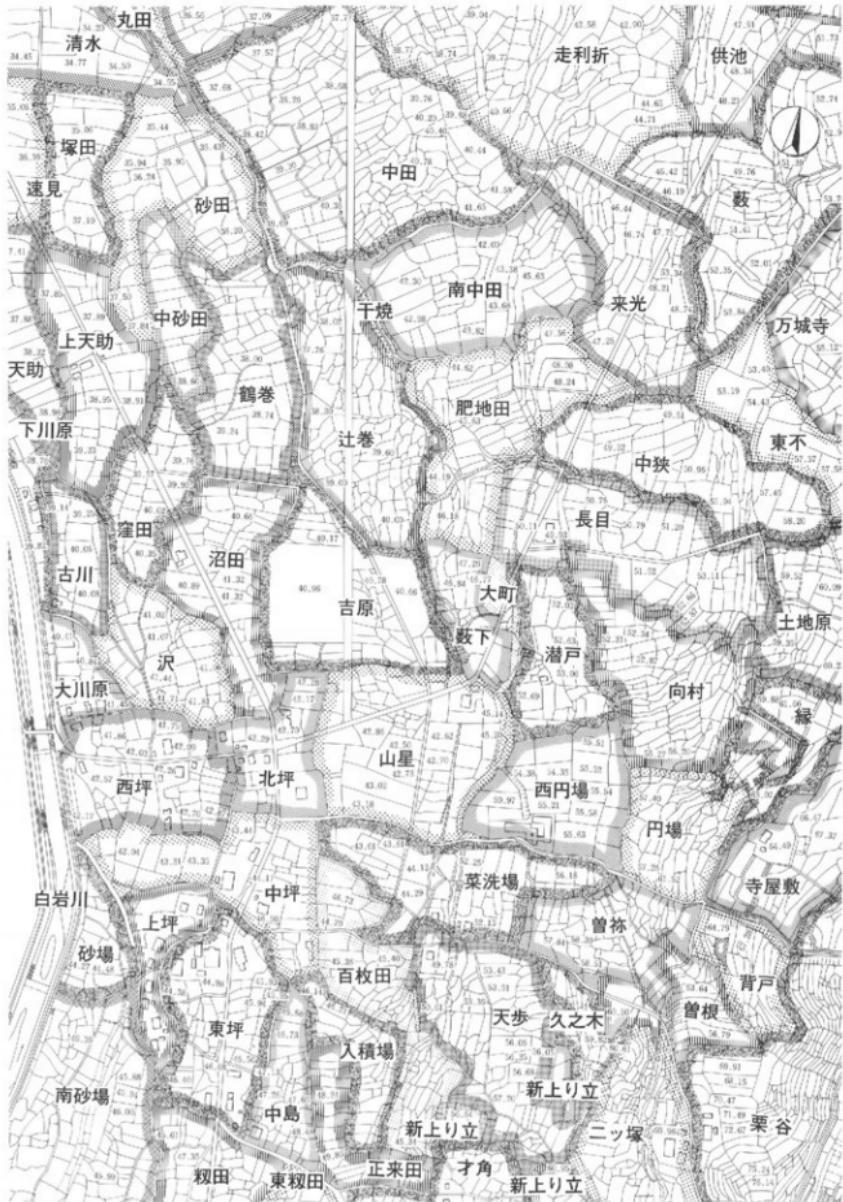
日置荘・井見莊の発生は石原氏の『白岩川中流域の歴史的事実』に詳しい〔石原 1956〕。

石原氏によると「井見莊は、恐らく日置神を奉斎したる日置莊と隣接するか又は、それを包括して呼ばれた大莊らしいが、記録上では、日置荘の発生(1156年)に後れること約220年をへて見出されるので、最後は、日置荘をも承継したもの様である」としている。このことは、日置荘から井見莊への考え方であり、文献上にみられる日置莊、12世紀中ごろから15世紀ごろ、井見莊は、14世紀中ごろ以後にみられ一致する。今回の調査で出土した12世紀～14世紀にかけての遺物は、日置荘と関係づけられるものかもしれない。しかし、遺構・遺物との関係は不明確であり、判然としない。

(酒井)

## 引用・参考文献

- イ 石原与作 1956 「白岩川中流域の歴史的事実——弓庄・寺田郷の研究——」  
石原与作・奥田淳爾 1977 「中世の莊園」「立山町史」立山町  
オ 尾崎元春 1968 「甲冑」「日本の美術」第二十四号 至文堂  
尾山京三 1977 「越中焼物シリーズNo.1 越中瀬戸焼」越中瀬戸焼保存会  
カ 加賀 薫 1934 「加賀越三州地理志稿」石川県図書館協会復刻  
サ 笠間良彦 1973 「日本甲冑図鑑」雄山閣  
シ 定塚武敏 1974 「越中の焼きもの」富山文庫2 巧玄出版  
タ 高岡 健 1980 「富山県 域解説」「日本城郭大系」7 新人物往来社  
ト 富田景周 1933 「越賀賀三州志」石川県図書館協会復刻  
富山県 1975 「富山県史」「資料編中世II」富山県  
モ 森田祐國 1951 「越中志徵」富山新聞社刊 石川県図書館協会復刻  
ヤ 山本久作 1934 「越中製陶史稿」  
ヨ 古岡康輔 1976 「越前・珠洲」「日本陶磁全集」7 中央公論社  
古岡康輔・平田天秋 1976 「珠洲古窯跡」「石川県珠洲市史」第一卷  
古岡康輔 1977 「越前・珠洲」「世界陶磁全集」3 小学館  
ヨ 米沢佳彦 1977 「武将たちの足跡」「立山町史」立山町



第17図 弓庄城周辺の字名図 (1/5,000)

富山県上市町

## 弓庄城跡

緊急発掘調査概要

発行日 昭和 56 年 3 月 31 日

発行者 上市町教育委員会

編著者 酒井重洋・神保孝造

橋本正春・奥村吉信

高慶 孝

印刷者 (有)日本海印刷

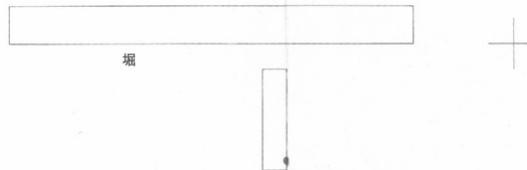
X121|X121  
Y151|Y150  
X120|X120  
Y151|Y150



X121|X121  
Y101|Y100  
X120|X120  
Y101|Y100

X121|X121  
Y81|Y80  
X120|X120  
Y81|Y80

X121|X121  
Y61|Y60  
X120|X120  
Y61|Y60



X111|X111  
Y111|Y110  
X110|X110  
Y111|Y110

X111|X111  
Y91|Y90  
X110|X110  
Y91|Y90

X111|X111  
Y70|Y70  
X110|X110  
Y71|Y70

X121|X121  
Y61|Y60  
X120|X120  
Y61|Y60

X101|X101  
Y151|Y150  
X100|X100  
Y151|Y150



X101|X101  
Y101|Y100  
X100|X100  
Y101|Y100

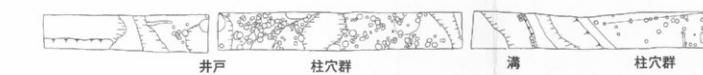


石敷



X91|X91  
Y111|Y110  
X90|X90  
Y111|Y110

X91|X91  
Y101|Y100  
X90|X90  
Y101|Y100



X81|X81  
Y111|Y110  
X80|X80  
Y111|Y110

X71|X71  
Y121|Y120  
X70|X70  
Y121|Y120

X71|X71  
Y121|Y120  
X70|X70  
Y121|Y120

+



X71|X71  
Y101|Y100  
X70|X70  
Y101|Y100

X71|X71  
Y81|Y80  
X70|X70  
Y81|Y80

X71|X71  
Y61|Y60  
X70|X70  
Y61|Y60

